

# 仏様のおはなし新シリーズ 第5・6集 「無量寿」

私たちのご本尊、阿弥陀如来のことを無量寿如来とも申し上げます。無量寿とは、限りの無いのち。私たちは量ることのできない、無量のいのちの繋がりの中で生かされてあるということです。

昨年、私は、この無量寿ということについて深く考える機会を与えられました。

私事になつて恐縮なのですが、共に暮らす母の死と二人目の孫の誕生を経験したからです。家の中に、

日に日に弱つていく母と、娘のお腹の中でどんどん大きくなつて行く孫がいる。当たり前といえば当たり前の事ではあつたのですが、その時の私にどうては、本当に不思議な事のように思えました。

そして迎えた母の死。そして、ようやく落ち着いた頃に新たないのちの誕生。

無量寿とは言うのだけれども、やはり人は何年何月何日に生まれ、何年何月何日に死んでいく。つまり私たちは限りのあるいのちを生きている。それもまた私たちのいのちの事実である。私にどうては、そのことを実感させられた一年でした。

しかし、だからこそまた、なぜ浄土真宗は無量寿と教えるのかといふことを問い合わせ直す一年ともなりました。

無限のいのちの繋がりの中で生きているということ。それもまた、確かに。私の父・母はともに亡くなつたわけですが、私のいのちは間違いなく今もなお父・母のいのちと繋がっています。孫たちとも繋がつてゐるし、今こうしてこの話をお聞きの皆さまとも、繋がっています。それだけではなく、現代の私たちの暮らしさは、それこそ会つたことも聞いたこともないようないのちとの繋がりの中で成り立つています。

無限のいのちの繋がりと、限りあるいのちを生きているということ。私たちはこの一見矛盾するかのように思える現実を生きています。

このことをどう受け止めるのか。

つまり私たちのいのちは、量ることのできないいのちの繋がりの中で生きているということ。それもまた、確かに。何年何月何日に死ぬという形で担いながら生きている。であれば、私のいのちを全うするということは、無限のいのちの繋がりの中の一部分を担い切るということなのではないのでしょうか。

では、どのように生きれば繋がりの一部を担い切るということになるのでしょうか。

それはやはり、私と繋がり、私を支えている様々ないのちに学び、それを自らの血肉とし、そしてまた私と繋がっている誰かに伝えていく、そのような當みの中にあるのではないでしょうか。

そのためには、多くのいのちから多くの事を学ぶことができるとなるのでしょうか。  
それはやはり、私と繋がり、私を支えている様々ないのちに学び、それを自らの血肉とし、そしてまた私と繋がっている誰かに伝えていく、そのような當みの中にあるのではないでしょうか。  
そのためには、多くのいのちから多くの事を学ぶことができるとなるのでしょうか。  
それはやはり、私と繋がり、私を支えている様々ないのちに学び、それを自らの血肉とし、そしてまた私と繋がっている誰かに伝えていく、そのような當みの中にあるのではないでしょうか。  
そのためには、多くのいのちから多くの事を学ばせねばなりません。このように考えるようになります、少々遅きに失した感はあるのですが、本当に多くの方々に様々な事を学ばせて頂いている自分に気付くことができるようになりました。無量寿という世界に領くとはそのようなことなのだろうとも思っています。  
そしてこれからもまた、多くの皆さまから多くの事を学ばせていただくことだろうと思ひます。  
と共に学び合い、無量寿の中のいのちを担い切れるよう、お互に微力を尽してまいりましよう。  
ご法話とさせていただきます。

